随想

フルーツ・パーラーとしての神戸

長谷川集平
〈絵本作家〉

ぼくは姫路で育った。家は洋服商で、生地は神戸の問屋から仕入れていた。正月に問屋の「売り出し」があり、ぼくら家族は毎年、いっちょうらを着込んで元町に出かけた。それは父が開業する時に世話になった店で、「売り出し」の日には家族そろって年頭の挨拶に行くことが、わが家の年中行事になっていた。父も年の始めに、初心に戻るような気持ちだったのだろう。とにかく苦しいやりくりをひかえて、自分をムチ打っているような迫力が、父の緊張した作り笑いのすきまから、見え隠れしているのを、ぼくと弟はおろおろしながら眺めていた。

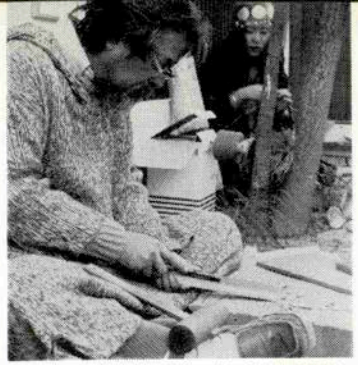
客の出入りの多い問屋のかたすみで、ぼくらは、毎年のように、あられの浮いたコブ茶をもらい、店の人が「大きいなったなあ」とかなんとか声をかけてくれる度に姿勢を正してうなづいた。父は、ぼくらがそうやって待っている間に、手際よく仕入れを進める。

仕入れが終わると、ぼくらの年中行事が始まる。問屋が、近くのフルーツ・パーラーの食券を、家族分だけくれるのだった。問屋を出て母と父に手をひかれ、フルーツ・パーラーにかけ込み、階段をのぼり、席につく。ランチを注文する。一年に一回だけの、その数十分に、ぼくはどれだけ心を踊らせたことだろう。ぼくは小さい時から病弱で、あまり、ものを食べなかった。けれども、その店のランチは、それこそがつがつと、目の色を変えて食べた。おいしいエビフライと、ハンバーグは、一切れずつ皿のまんなかに、最後までとっておいた。

目をあげると、父は、ナイフとフォークを魔法のように上手に使ってライスをすくい、口に運んでいた。はだかひとつで商売を始める前は、姫路でも指折りの洋服商の息子だった父の、きれいな動作だった。母は、ゆっくりゆっくりと食べていた。弟は笑いながら食べていた。すりガラスから陽の光がシャレた店内を照らしていた。ぼくらの一家は、問屋がくれる食券でもなければ、こんな場所で食事をすることなど、めったになかったのだ。

ぼくは現在、東京に住んでいて時々「神戸ゆうて、ええとこやなあ」と思う。友人が「兵庫県のド

カット　長谷川集平
すばる書房刊「絵本宣言序走」より



父君・牧生氏と仲むつまじく（右が筆者）

イナカ出身か、おまえさん」と言うと「なにゆうとんや、神戸があるで」と言ったりする。けれどもぼくは神戸のことをほとんど知らない。高校まで姫路で過ごしたが神戸に行ったのは、年に数回しかない。ぼくが、コウベという言葉にくすぐられるのは、ただ、あの頃ぼくらの家族が年に一回、ちょっとシャレた、あたたかい時間を過ごせたのが、神戸のあのフルーツ・パーラーだったということだけだ。そこいらのレストランに入り、軽く注文するだけで、あの時よりも数段上等なハンバーグが食べられるようになってしまった今となっては、思い出すのも困難なぼくらのひとときが、神戸にあったということだけだ。〈在東京〉

芸術青空のみの市—ART BAZAR

山口さとこ
〈アーティスト〉

毎週日曜、正午から日没までオープン（雨天中止）・作者直売・制作実演公開・フリーマーケットだれでも参加できます——。

彫刻家の父が30年間も勤めてきた教師というサイドワークを止めてしまい、アートバザールを始めました。毎週日曜日にはわが家の前にものずきな仲間たちが地面に布きれを広げて手づくりの「モノ」を並べます。現代美術に消化不良を起こしていた私も毎週訪れる台風に巻き込まれて「モノ」を創らざるを得ません。制作意欲をうながすのもアートバザールの効用ですが、なによりも全体からくる雰囲気が予想以上に強烈で、むしろ現代美術は副産物のような気さえします。

もちろん現代には現代美術が必要で、私たち現代人にも不可欠ですが、現代美術が恐るべきリアリズムで現在を反映するので、私たちは自分の姿を見せつけられてうんざりさせられるのです。私たちはもう充分自らを客観的に、きびしく戒めてきたと思われます。今日の絵画はカメレオンの様に壁紙と同化し、立体作品は街路のゴミや石ころと見分けがつきません。まるで自らの羞恥心で消え入らんばかりです。これは私たちの願望をみごとに象徴しています。それでも私たちは精神病理学が与えてくれた「文明病」という名のもとにかろうじて文明人としての自尊心を維持してきました。しかし文明病もブームとなっては自尊心に欠かせない稀少価値が危ぶまれます。冷やかな理論と決別してアートバザールが生まれるのは当然のなりゆきです。

ここでは日曜ごとに芸術と市場がお互いの異質な領域を超えて一体になろうとしています。芸術・市場・モノ・人間・男・女・老人・子供……が雑然と集まって小さな混沌が生れます。まださやかなにぎわいにすぎませんが、生まれたばかりのいきいきした活気に満ちています。一応は閑静な住宅街だけに苦情もでますが、それも裏を返せば無関心ではいられないことの表われとも受け取れます。小さなトラブルは実験的な試みならではの伸縮性に呑みこまれて、ハプニングの意外性や初めての喜びにつながってゆきます。

あらゆる意味で異なった人との会話はむしろ出合いの偶然性に助長されて機知と変化に富み、各自の立場や責任を忘れてとんでもないことをしゃべらせたり、若い人たちのちょっと不真面目な会話に思いがけず自分の姿を見つけたりするものです。そんななかでもいちばん若い人が「ぼくにはもう自分というものがない。だから誇りもないし恐いものもないよ」と実

にチャーミングに笑いながら言ってのけたのには驚きました。このような無邪気さこそ恐るべきことだといえば自ら臆病を告白することになりかねませんが、それも忘れて恐いものに魅かれるのは私に限ったことではないと思います。

■アートバザール　夙川駅より東へ徒歩12分、西宮市西田町4－15、山口牧生方、TEL 0798・74・3863

三度目の青春

愛田　洋子
〈ポピュラーシンガー〉

ジーンズ姿に数枚のメモリー帳を小脇に抱え、北野の坂を登ったのはもう三年も前のこと。北野クラブで歌っている友人からの紹介で、オーディションを受けるべく私はやって来た。そこからの素晴しい景色に目をとられながら正面玄関のドアを開けるとまたドアがあり、小さなフロアがあって、当時、赤いジュータンと黒の重々しいカーテンが創立二十年の伝統を語り、私を一層緊張させた。黒の蝶ネクタイを締め、ピシッときまったボーイさんに案内され、ステージに近いテーブルに腰かけた。ほんとはボーイさんが引いてくれた椅子と腰を下すタイミングが悪く、大きなヒップが半分ものっからず、そっと自分で椅子を引き寄せ座り直した。緊張のせいかどうも落着かない。たびたびお手洗が恋しく「行って来るわ」「また？」付添ってくれた友人が苦笑する。「お待たせしました」と丁寧なあいさつで二人の男性が席につき、自己紹介の後、いろいろな質問を受ける。テーブルの下の私の太い足がやたらと勝手に動き、それを手で抑えながら質問に答えた。うまく答えられないところはひきつった顔で、その笑顔でしばしばごまかした。そのうちにステージから音が出、縺れた足でステージに上る。チャンスは逃す訳にはゆかない、そう思うとちょっとハッタリめいた大げさな感じで精一杯唄えた。汗が流れて、目につけている化粧が目の周りににじみ出て、タヌキのような顔でステージをおりた。「明日から来て下さい」といわれた時、生きるための新たな糸口を摑んだようでいいようのない喜びを感じた。こうして私の三度目の青春と題した道を歩み始める。振り返ってみれば、何不自由なく十代を宝塚歌劇で過し、若くして結婚した私は、何の苦労も心配もなく日々をおくっていた。夫は電通マン、普通の会社勤めとは違いはなやかだった。幸せだった。ちょうど結婚して九年目の暮、夫の身体の不調に気づいて病院を訪れた時はもうすでに手遅れ。病気一つしなかった強壮な身体はガンにおかされていた。数カ月で生命の終りをいいわたされたとき、一瞬時は停り、血は逆流し、震えが全身をおそった。ともすれば気を失ってしまいそうな自分に自分の舌を血がにじむほどかんでささえたことを忘れはしない。二度の手術を受け、一年が過ぎ、もしやと誤診を願い奇跡を祈った。だがその二カ月後、夫は三十二才の生涯をとじた。死ぬことを待つ身の夫のそばでの一年二カ月。ガンをさとられまいと自分自身をもだましつづける長い長い日々だった。

残された私は当分の間廃人のようで、でも生きて行かなければいけないと気付いた時、この悲しみからのがれるために何かにうちこもう、それが歌だった。つらい悲しみを背負ってのスタートだったけど、青春というものが楽しく長い道となるか、長い暗い道になるかは自分が決めること。険しい道だけど私でしか唄えない歌を私は唄えることを信じて、一生懸命勉強して行くつもりです。

■愛田洋子カクテルショー
7月5日（木）6時　於・北野クラブ

□ある集いその足あと

神戸山草会

合田　隆行
〈神戸山草会会長〉

「春の山草と高山植物展」も今年で10回目を迎えた。

昭和十年創立、これは全国に数ある山草会の中でも、歴史の古さでは北海道山草会の五十余年に次いで二番目。会員は約二百名。入会金千円、年会費二千円。例会参加費三百円。

山野に自生する山野草の素朴な美しさに魅せられた若者たちが集まり、毎月一回、王子公園の登山研修所や県民会館で例会を行う。

例会では愛培の鉢を持ち込み栽培の苦心談や失敗談を中心に、自生環境の説明、その草や木の特徴の解説、市中で栽培するにはどうするか、用土は？置場は？管理は？何年も持ちこむにはどうするか、さらに殖やすには？等。毎月担当を決め、役員が講師になり、それぞれ得意な面から解説している。年間行事のハイライトは、ゴールデンウイークの一週間、市立相楽園の庭内で開く「春の山草と高山植物展」。会員が一年をかけて苦心し、育てた鉢が、三～四百鉢もずらりと並ぶ。相楽園での展示会は、今年で十回目。つつじも真盛りで、若葉が映える静かな庭園も、この期間中は連日大盛況。すっかり市民の間に定着した感じだ。会員は、会社員や主婦が多いが職業は種々雑多。最年長は八十余才から最年少は二十数才。経験五十数年の人も一年生も。例会では社会的な地位は無関係。年の上下も男女の差もない。好きなことならみな平等だ。それに神戸山草会には会則がない。それでも運営はスムーズ。そんな雰囲気を残してくださった先人達に感謝している。戦前には、会長もおいてなかったときかされた。

会誌「神戸山草」七号を今春出した。四十九年に、文研出版から「入門　山草・野草」という手引書も出した。くだいた説明が、全国の愛好者に喜ばれ、山草のバイブルになりつつある。五十三年春に、のじぎく文庫から「六甲の山草」を出した。その他、共著の図書も多く、園芸雑誌の山草コーナーも担当している。

山草栽培は、ほかの園芸植物と違って、気難しいものが多く、一日として気をゆるめられない。寸暇を惜しんで手入れする。早朝五時起き、出勤までの一～二時間、帰宅後灯りをつけての植え替え、害虫退除。深夜、探見灯をもって庭をうろうろ、警官に叱られた人も。草や木の顔を見て、相手の気持がわかれば、やっと一人前。山草栽培では苦心の末、咲いた花も嬉しいが、枯れたような小さな株から、春に新芽が出るのを見る喜び、ときめき。なんともいじらしく、可愛いいものだ。

小さな草の一株ひと株に、細やかな愛情をそそぎ、相手の気持を汲みとり、いたわり、世話を続ける中には、いまの都会生活に失なわれつつある気持のゆとりと潤いが残されている。

種子を播き、挿芽をし、株分けで山草を殖やしている本当の愛好者には、自然破壊など、とんでもないこと。消極的かも知れないが山草栽培が自然愛護に果たす効果は、奥深いものがあると信ずる。

■事務所／神戸市北区緑町六丁目九―十一
宗定三次方　〒078―581―0646

オリエンタル
レディスクラブ

会員募集中

月例グルメの会：シェフによるメニュー説明

年会費：お一人 5,000円

割　引：オリエンタルホテル、六甲オリエンタルホテルでの宿泊、飲食の際サービス料10%割引いたします。その他いろいろの特典がございます。

特別催：随時、会員のための特別催しをいたします。

お問い合せ

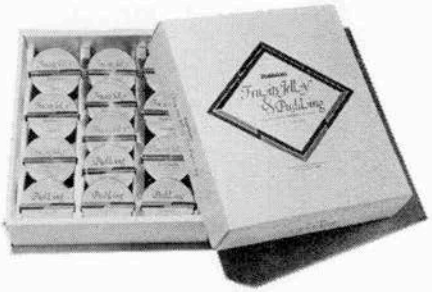
オリエンタルレディスクラブ事務局

神戸市生田区京町25　オリエンタルホテル内

☎(078)331－8111

5℃の風

ユーハイム　デザート



ドイツ菓子

Juchheim's

ユーハイム®

このマークのお店でお買い求め下さい

本　　店	神戸市生田区下山手通2－31	TEL (078)331－1694
三 宮 店	神戸市生田区三宮町3－15	TEL (078)331－2101
さんちか店	神戸市生田区三宮町1－1	TEL (078)391－3539
西ドイツ本店	フランクフルト・アム・マイン・アム・ザルツハウス1 ゲーテハウス内	TEL (0611)280262－3

□連載エッセイ／私のひろいもの〈5〉

堀辰雄の記念地

竹中郁〈詩人〉絵も

小説家の堀辰雄が初めて箱根をこえて関西の土をふんだのは昭和七年十二月の二十三日の夜だった。元町三丁目浜側の「藤屋」という洋菓子店の喫茶室からわたくし方へ電話をしてきて、いま到いたところだ、なんとか宿をきめたいから出てきてくれと電話をかけてきた。

それからあとのことは、堀君の「旅の絵」という小説に詳しく書かれている。筑摩書房の堀辰雄全集にもはいっているから、未読の人は読んでほしい。若いころの私がT君として登場してくるから。

さて、去る四月二十七日、中山手通り生田神社裏に開店した「ふじい」というレストオランへ開店祝いに招かれて出席した。神社裏の大きな消防署の建物から東へ三四軒目の前庭をかかえた建物がそれだ。そこの二階の会場へみちびかれた途端、窓からみえる生田の森の繁みをみた。それとその家の占める土地の広さ。その二つの条件から、ここはエソヤンホテルの跡にまちがいないと睨んだ。

エソヤンホテルというのは今から四十六年前に堀君をつれて投宿させたそのホテルである。木造二階建、日本瓦葺き、鎧戸両びらきの窓が表側二階に四つくらい列んだ小柄なホテル。もともと西洋人向住宅として建てたにちがいない狭いものだ。

とにかく風変りなホテルに泊りたがった堀君の気に入ったもので、一階の奥まった八帖くらいの部屋へ落ついたのだった。そこの窓から森の繁みがみえていたのだ。

ここがその跡だと睨んだので、その店びらき祝賀スピーチに換えてしゃべったら、その経営者の藤井夫人がこういわれた。「イソヤンはうちの貸家でしてん」と。

わたくしは四十六年前からずっとエソヤンと思いこんでいた。ホテルの主人の顔つきからポーランド人かいなと思いこんでいた。藤井さんは「ロ

シヤ人でしてん」との返事。藤井家での「イソヤン」といういいならわしが当然だから、その位置の確認とともに、この確認もまあ貴重だ。

堀辰雄の小説を卒業論文に扱う大学生がちょいちょいあって、電話や手紙でわたくしに質問事項をもちこんでくる。堀君の通った道順を教えてくれとか、ホテルのその後はとか、そのホテルは戦災で焼けたのなら現在はどこに当るか、などと小うるさいことをきいてくる。この「ふじい」レストオランがそこだと突きとめたからには、今後は「ふじい」へ行ってききなはれ、何かたべて女主人に根掘り葉掘りききなはれ、と返答ができるというものだ。一つ肩の荷がおりたというものだ。

堀君はここで三晩くらい泊って、クリスマスの町の賑わいなどをみたことは小説の中に詳しく書いている。そののち、わたくしの家へ来て二晩くらい泊って帰京した。その礼ごころからでもあろう。「旅の絵」一篇はわたくしにデジケエトされて、その旨が記されてある。

神戸の明治時代の異人館を描きまくってきた小松益喜君も、このイソヤンホテルはスケッチすらしてないと思う。それほどの作りではなかったからだろう。北野町や元居留地の絵になる異人館は、同じものでも二度三度と手がけているが、ここは手がけてはいない。

うろ覚えだが、わたくしの拙い記憶画をここに添えておく。

□最新刊
竹中郁詩集「ポルカマズルカ」
五百部限定版
発行所　東京都千代田区内幸町一ノ二
　大阪ビル　潮　流　社
直接註文には著者筆色彩カット付
予価（約四千円）

□神戸女子薬科大学と神戸 〈3〉

空襲下に大活躍 神戸女子薬専救護隊

金子太郎
〈神戸女子薬科大学学長〉

第一回卒業生を社会に送りだしたのは昭和十一年三月であったが、卒業を前にして彼女らは後輩へのおくりものとして願いをこめて構内一面に桜を手植えてくれた。身の丈ほどの小さな桜の苗木約二百本であった。のち戦時中、炊事用燃料にさえこと欠いた寄宿舎生らが先輩への感謝をこめつつ一部を切り倒し炭焼きしたのもこの桜であり、いま大学構内を埋める大木に育ち春ともなれば後輩たちの眼を楽しませ、学園に美しいうるおいを添えているのもこの心こめられた桜である。

神戸女子薬専の名がようやく世間で知られるようになってきた昭和十三年、榎並理事長と大藪校長は惜しまれて退任、その後任として理事長に県学務部長奥田久七郎氏、校長に金沢薬専教授瀬戸文雄氏が着任したが、瀬戸新校長が着任早々手がけたのは教員の研究環境づくりであった。それまでは専用の研究室とてなく、教員は実習室隣の準備室で実習用の器具や薬品を使い研究心を辛うじて満足させていたというのが実情で、本館地下室が研究室に転用され、徐々にではあるが研究用機器が整備されはじめたことは、私たち研究意欲にうづいていた若い教員にとっては何より大きな喜びであった。

ところが、このできあがったばかりの地下研究室も研究活動開始半歳ならずして、はからずも起った阪神大水害で泥土に埋もれてしまった。昭和十三年七月五日、数日来降りつづいていた梅雨にしては珍しい大雨が夜明けとともに篠つく豪雨となった。九時を過ぎる頃は学校横を流れる川は氾濫、校門への道は土砂と流木の濁流と拡がり、構内の池の水は堤を越さんばかりになっていた。これはただごとでないと判断した瀬戸校長は通学生に急拠帰宅を命じ、教職員と寄宿舎生に顕微鏡や重要書類を安全な場所に運ばせたが、その頃には早や重要書類を抱えて走る生徒たちの足を池の堤を越えた濁水が洗いはじめ、堤防決壊寸前というところまできていた。寸刻の差で起ったのが山津波、ドドドッと大きな地響とともに裏山が崩れて池の中に流れこみ、あふれた濁水が堤を一挙に破り桜を倒し本館地下研究室にとびこんできてしまった。遠く住吉、灘の方面からときどき山津波か、遠雷のような無気味な音がこだましてくる。数千名の死傷者を出し方を超える家屋を土砂とともに流し、埋めてしまった未曽有の大水害であった。水害のあと、真夏の炎天下、馴れないスコップを手にして生徒たちは連日復旧作業に

制服制帽の神戸女子薬専報国隊救護訓練（昭和18年）

あたったが、汗と泥にまみれて懸命に働く彼女らの姿は美しく、いつまでも脳裏に焼きついている。

昭和十六年十二月八日早朝、坂道を登り、校門あたりで聞いたのが「大本営発表、今十二月八日未明、帝国陸海軍は米、英と戦闘状態に入れり」というラヂオ放送であった。まさかと思っていたのにいよいよ始まったか、すでに泥沼にはまりこんでいた中国との戦いにさらに米英を敵にまわすとは、大丈夫だろうかとの危惧の念が一瞬頭をかすめ、かねて覚悟のことではあったが身のひきしまる思いがした。やがて学校内は日一日と戦時態勢にはいり、高学年生は塩野義製薬、第一製薬、武田化学あるいは校内実習室での海軍療品廠製薬作業、低学年生はリンドウ、センブリなど薬草採集、食糧増産農地改良工事、航空機工場作業に勤労動員されたが、同時に県下唯一の医療系学校として神戸女子薬専報国隊救護班が編成され、生徒たちは担架隊、救急隊にと分属された。戦況が厳しくなるとともに、ガスマスクをつけての防毒防空訓練や街頭に出ての救護訓練もしばしば行われたが、この薬専救護隊はその後アメリカ空軍による東神戸地区大爆撃のとき、大活躍することとなった。

昭和二十年五月十一日、空襲警報と同時に瀬戸校長の命令一下、全校生は防空、救護態勢にはいった。やがてごうごうたる爆音とともにアメリカB29重爆撃機六、七十機の大編隊があらわれ、薬専下の川西航空機工場を目標に大型爆弾を雨下させた。たちまち二千名にも達する死者、重軽傷者がうめいたが、生徒たちは急拠動員され担架を血に染めて負傷者を収容、遠い山道を薬専まで運び、応急手当を施し、夜を徹して看護にあたった。かよわい乙女たちではあったが、生徒たちは我が家、家族の安否を心配するいとまもなく、我が身を捨てて実によくやってくれた。この活躍の様子は、のじぎく文庫の「神戸大空襲」に「大活躍の女子学生救護隊」の見出しで、「山田千枝さん（当時十八才）ら神戸女子薬専（現神戸女子薬大）の救護隊は医療隊、担架隊を編成、七十の担架を血に染めながら負傷者の救護にあたり、三キロの山道を往復し、重傷者を学校に収容、かいがいしい働きをみせた。爆弾で飛散した犠牲者の一片の肉塊、手足までもていねいに拾いまわった（神戸市史）」と記され、また山田は「救護隊に用意してあったすべての繃帯は使い果し、ついには寄宿舎生のシーツを裂いて傷口の応急手当をした。肉がさけて血がどくどく流れ出し、手当の最中にも何人かが息を引きとった。気が張っていたためでしょうか、不思議とこわさを感じませんでした」と述懐している。

連載随想
●ずっこけ年表〈1〉

神戸の女族

春木一夫〈作家〉
まんが・たかはしもう

神戸はどうも大変なところになってきた、女族のはんらんである。共産党じゃないが、徐々に平和革命が進捗しつつある。男子たるもの、今こそ目覚めて、女どもに一大鉄槌を下すべきなのに、それがてんでだらしがない。

昼間は会社や役所で、相手の顔色を見ながら、

「これ、ちょっとやっといて貰われへんか」

と、腰を低うしてお願いする。

茶汲みでも頼もうものなら、

「自分のことは自分でしなさい。お茶汲みなんか、私の事務分掌に入ってません」

と、一喝。

自動車やエレベーターに乗るときでも、

「お先きにどうぞ」

と、見たこともない国のエチケットを、男は自分に強制して、悦にいっている。

それに、夜になるとだ。三宮のバーやスタンド小料理屋にいってまで、ママやホステスのご機嫌取り。

「あんた、遊び方が上手やね」

とか何とかいわれて、眼尻りを下げている。

アホかいなと思うが、これが事実だから、どうにもしょうがない。

男どもが酒を呑んだり、麻雀にうつつをぬかしたり、甲子園での野球見物や舞子でのゴルフにこったりしている間に、女族どもはせっせと、教養や技術を積み重ねていっているのである。

文化教室、旅行、講演会のカモは、女である。男なんて働き蜂ぐらいにしか思われていないからそういう方面への勧誘はない。あっても、停年後のひま人くらいだ。可愛いいわが子の教育にして

も、神戸のPTAは母親がガッチリにぎっているから、先生も女の意向を重んじなければやっていけない。かくて、女性的男性。つまり、オカマのような男ができあがる。

「ママ。試験についていって」

これが神戸の大学受験生。キンタマはどこについているのだといいたい。

どうして、こんなことになったのだろうか。

その一は、女族への参政権付与。第二は男女共学。第三は商品購売者として、マスコミの迎合である。女も一票なら、男も一票。政治的識見の有無なんぞは、関係がない。

「あの人、ハンサムやね」

「あの洋服、洒落とうね」

で当選するのだから、政治家の方でも、女を打てと、ドーラン化粧までしてご機嫌を取る。

男女共学で、女は男の貧しさを知り、男への興味を失なった。男によりそって生涯を託すよりも自活をしよう。セックスはその日の風まかせ。チラリと流し目でも送れば、神戸の男は一ころ、ぐらいに思っている。

新聞、雑誌の購入は、主婦の権限。テレビのチャンネルも主婦とジャリがにぎっている。商品のアンケートへの回答、大丸やそごうの特売市への参加、テレビ画像のうしろにずらりと並んでいる群集……。どれもこれも女たちばかり。

このような現象を見るにつけ、神戸市民である私は、神戸いや日本の将来に対する危惧感を、いよいよ増大させていく。

戦前の神戸や日本には、男女同権などということはなかった。従って、政治家は女に媚びる必要がなかったのである。男女共学も異例であった。だから私など、女に対する知識はゼロ。女は神さまか、セックスの対象どちらかの二元いや、一元論に徹底していた。つまり、いずれにしても、女性は憧れの的だったわけである。ヴェールを透しての女人。それはこの世には存在しないと思われるような、美しく優しく、いとも妖しき人類であった。彼女たちはメシも食わず、排せつ作用もしないくらいに、高貴な存在だと夢見ていたのだが、無残。それが戦後は、嫁はんを貰い、娘を、しかも三人もつくることによって、こやつらも男と同じ人類であることを目のあたりに見せつけられた。それから私の絶望の人生が始まる。

神戸の女族どもは、今では男を支配する実力をすでに身につけていながらも、そんなことはおくびにも出そうともしない。外面女菩薩、内心如夜叉といわれるくらいだから、

「女はアホやから」

とか何とかにこやかに微笑みながら、テレビの教育番組を見、文化教室に通い、文化講座・講演会に出席し、各地の歴史めぐりや外国観光に参加している。チリも積もれば山だ。文化的チリの集積量は、やがて男を凌駕するだろう。

「原始、女性は太陽であった」

と、青踏社の女性解放論者は叫んだ。

その夢が、今実現しつつあるのだ。それに対する男性軍の防備は……。

いかんながら、神戸は無防備都市さながらの状況にある。女性の足下にひれ伏すのも、時間の問題ではなかろうか。神戸の男性よ、奮起せよ！

（無理やな……。）

刀剣 古美術

鑑定 買入 刀剣研磨 その他工作
一ヵ月仕上 是非ご用命下さい。
お支払いに便利なローンをご利用下さい

刀剣 古美術 元町美術

神戸市生田区元町通6丁目25番地

TEL 078-351-0081

きもの工芸

おんがら屋

神戸

本部・仕入部	神戸市東灘区青木五丁目一五ノ一九	電話〇七八―四五二―五二九〇（代）
本店	神戸市生田区三宮町二丁目一―五	電話〇七八―三二二―五二九八（代）
さんちか店	神戸市生田区三宮町一丁目一	電話〇七八―三二二―一七〇〇

東京

銀座コア店	東京都中央区銀座五丁目八―二〇（四階きものコア）	電話 〇三―五七三―五二九八（代）
銀座メルサ店	東京都中央区銀座五丁目七―一二（六階和装街）	電話 〇三―五七四―八〇六五（直）
渋谷東急店	東京都渋谷区道玄坂二丁目二四―一（五階呉服売場）	電話 〇三―四七七―三四〇九（直）
日本橋東急店	東京都中央区日本橋通一丁目九―二（四階呉服売場）	電話 〇三―二一一―〇五一一（代）（内線二九四）

手

諸岡 博熊
＜文化開発研究所所長＞

職業分類とまでいかないが、世上、運転手、騎手、投手など「手」という字が人間の全体を意味することがある。たしかに、作業をするはたらき手であり、芸術作品を生み出したり、感情を表現したり愛したりという人間的な行動のほとんどを受け持っているといえよう。

手をにぎりあうというしぐさは信頼、愛、友情などの表現である。また、こぶしをにぎるのは、気力や決意の強烈な表現といえよう。

大脳皮質の〝前中心回〟にからだの各部分の運動を司る最高司令所が目白おしに並んでいる。そのうち、手に対する司令所の広さはほぼ胴体全部に対する司令所の広さに等しいといわれる。とくに親指に対する司令所は、ほぼ大腿、下腿、足の全部に対する司令所を合わせたほどの広さがある。大脳における司令所の占有面積の広さの大小で、手や指の重要さの評価のしくみがわかる。

指先や手のひらには特別な感覚装置がある。とくに、指には郵便切手よりも狭い面積に数百万個も含まれていて、パチニー小体とよばれる黄色・卵円形の圧力を感受するしかけがある。

全身にあるパチニー小体数の四分の一近くが指と手のひらに分布している。そのうち、人さし指にはとくに豊富で圧の感じに非常に敏感である。盲人が点字を読むのに好んでこの指を使うのは、この指がその目的にもっとも有能だからである。

指先にある皮膚のひだの模様が指紋。これは万人不同、終生不変の個人認識票といえる。計算によると、六百四十億人に一回の割に同じ指紋があるといわれる。10の60乗回に一回という説もある。犯罪者の認識票として警察では使用されているが、医学的には、ある種の遺伝性心疾患や特殊な眼や精神病の患者をみつけだすのに有用性があるといわれている。

デューラー〈手の習作〉より

手のひらの手相というものは、人間のたどるべき運命の筋書きをあらわしていると信じられる。つまり手相占いである。これは、古代インドで手相による運命判断や吉凶の占いを行ったことが、ギリシャ、エジプト、中国の周時代に渡り全世界にひろがった。現在では、コンピュータ占いが盛んである。

航空機疑惑で筆跡鑑定が問題となったが、字を書くには、親指、人さし指を主として、手首、腕、肩を協調して動かす。

つまり、30以上の関節と50以上の筋肉の連繋動作が行われる。

したがって、書いた字に個人差が生ずるのだ。

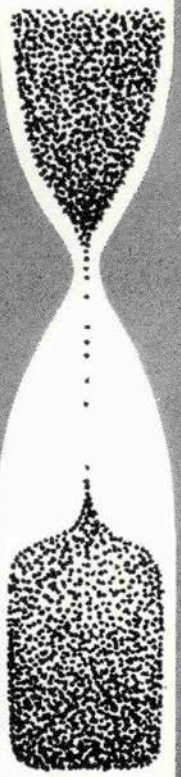
二人の人が同一筆跡である可能性は68兆回に一回しかないといわれている。

ここに、筆跡鑑定とか、承認のしるしとしての署名が有用となるのである。

★キャンペーン
国際文化都市神戸を考える

世界に誇る国際展示場と国際会議場を

宮岡　寿雄〈神戸市経済局長〉
多田　栄治〈神戸市経済局振興課・神戸市開発管理事業団調査役〉
百々　和〈神戸大学経済学部教授〉
鬼塚喜八郎〈株式会社アシックス社長〉
北川　勲〈同和通商㈱社長・神商議貿易部会長・神戸貿易協会副会長〉



⑲

――ポートアイランドの核ともいうべき国際展示場、国際会議場（国際交流会館の地下一階―地上四階部分）の建設がいよいよ今月から始まります。そこで今回は、国際展示場と国際会議場をテーマにお話をお願いします。

基本設計の固った国際展示場と国際会議場

宮岡　ポートアイランドの利用計画委員会の中で、一番大きなものとして出て来たのが、ホテル、国際会議場、国際展示場で、その周辺にこれらを取りまくファッション街区をつくろうじゃないかということがあったわけです。国際会議場は京都にもありますが、ホテルとか周辺機能を合わせた総合力ということでは問題がある。幸いポーアイでは、ホテル、会議場、展示場を一緒につくろうというのが、一番最初の利用計画委員会での骨子になっています。その後いろんな経過があったんですが、いよいよ実現できるというのは大変意義がありますね。

百々　神戸大学も段々と国際化して来まして、留学生の数でいうと五、六年前は三、四十名だったのが、現在は七十八名。やがて百名近くなる。それでポーアイに留学生会館をつくることになりました。来年の三月から着工して、五十六年に出来上がる。規模でいうと、単身が五十名、夫婦者が二十名。神戸市に土地を造成していただきましたので、それを神戸大学が利用させてもらうということです。国際会議場についても神戸大学が使わせていただかないといけないと思います。また、そうでなければ運営は仲々難しい。国際会議を神戸へもって来るというのは仲々困難ですが、国内の学会はいろいろありますので、そういったものをまずもって来る。ホテルがすぐ近くにあるのも非常にいいことですね。

北川　国際交流会館には人が集って来る。人との出会い

北川　勲さん

鬼塚喜八郎さん

百々　和さん

多田　栄治さん

宮岡　寿雄さん

ですね。国際展示場ではいろんな見本がそこに集約される。モノとの出会いです。国際交流会館での対人情報、国際展示場での対物情報、この二つがポートアイランドに収まっているということは、私どもの貿易そのものが国際情報の集積という背景に立たずして成り立たない産業ですから、非常に心強いと、こう感じております。

多田　国際会議場、国際展示場共、基本設計が大体固まりましたので、誘致パンフを作製、国内会議や展示会の主催者になり得る団体、それから国際会議のホスト団体、そういうものを全部ピックアップして誘致を働きかけたい。また、建物をつくったあとのソフト面については委員を委嘱してご意見を聞く準備も進めています。

宮岡　国際会議場については、国際会議だけじゃなく、国内会議や催し物にもずい分と使われるという前提に立って、七百人収容の、席数では文化ホール中ホールのやや小さ目のホールが地下一階から地上二階にあります。舞台につきましては、音響効果そのあたりを考えて、幾分多目的とはいいながら、特色をもたせています。舞台の前にはセリなどもありまして、ファッションショーなどにも使いやすくなっています。三、四階は会議フロアで大小合わせて十四の会議室と代表団控室、レセプションホールなどがあります。相楽園のよりもやや小さ目のデラックスなものをつくりますので、国際会議だけではなく国内会議にもずい分ムードの高いものとして使われるでしょう。高級な国際会議というのは、同時通訳の問題もありますのでいっきょには行かないので序々にやって行かないといけないと思います。

国際展示場につきましては、今のサンボーホールの二倍分あり、二階は柱もなく天井まで五米ほどで、サンボーホールに比べてずい分と高くなっている。屋根は自然採光をとろうと思えばそのままで、要らないときは蓋をするという開閉式です。今、東京と大阪でやっております国際的なものも専門的なものも呼ばないといけない。すでにサンボーホール自身、場所が狭すぎて誘致できな

いものがありますので、そういうものをどんどん誘致する。

多田　一階は一平方米約三トンという重量に耐えられ、相当な重量の機械展示ができます。二階はソフトなつくりで、三千平方米の展示場を千三百平方米と千七百平方米の二つに間仕切りができるので、ヴァラエティのある使い方ができます。しかも、両サイドの中二階に手摺りをつくって、そこから変化のある照明や撮影もできる。演壇を置けば会合もできます。また、国際会議場の豪華な絨緞敷きのところで、真珠とか、宝石、毛皮などのファッションショーにも使って貰いたいなという感じもしています。それから、先ほどのセリですが、客席四列分百数十席を下へ降ろして片づけると、舞台にもなるし、平土間にもなるというものです。

国際展示場をアジアの見本市の拠点に

鬼塚　国際会議場は、おっしゃるように序々にやって行くということでいいと思います。ただ、国際展示場は、サンボーホールの二倍というのは狭すぎると思いますねなぜかというと、大阪南港の見本市会場にしても、たとえば、我々スポーツ業界の見本市会場として使った場合狭すぎる。狭すぎて何もできない。だから、今のサンボーホールを二倍にした程度では十分であるとはいえないという気がしますね。市長の考えでは、広いものをつくっても運営に困る、果して利用があるか、だから、まず第一段は今の規模にして、必要なら第二段としてさらに拡張するという方向でいいじゃないか、という長期プランがあるので、第一期の展示場としては止むを得ない一つの線だろうなと、そういう気がします。

　また、展示場の規模と同時に中味がどの程度充実しているかも大変重要な問題です。たとえば、アパレルのフェアをそこでもとうとしても、板張りの建物では全然ムードが出て来ない。絨緞の敷いてある食堂を持つくらいのかなり高度の内容をもってそこのムードが最高になるように、展示するものが最高のクオリティのように、そういう内部の設備に工夫し、また、内装には資金をおしまないようにしないといけない。今、日本の各展示場をみると大変お粗末なものばかりだ。そこで、各メーカー、各商社は高い金を払ってホテルを使っているわけです。ホテルだと会議室や広間は割とデラックスになっていますのでね。いろんなサービスも付随していると同時に、ムードもよく、そこでやるイベントもハイクラスのものに感じられる。ですから、国際展示場は従来のものとは趣向を異にした中味のあるものにして行きたい。したがって、ここを利用する層は神戸のメーカー、神戸の卸し売り業界だけであってはいけない。日本の卸し売り業界なりメーカーを結集して行くような展示場にしていかないといけない。たとえば、カメラでも世界で最高の見本市はケルン（西ドイツ）で行われる見本市です。ケルンの敷地は約二十万坪。建物は十五棟ほどあります。駐車場には一万台ほど入ります。そういう大きな展示場になりますと、世界中からバイヤーが集って来る。三十数か国、四十数か国というメーカーが参画して行く。そこで、ハイクラスのファッションが流行して行く。そこで有名になると、それが世界の隅々まで浸透して行くわけです。そういうことを考えて行くと、ポートアイランドの展示場で行われる展示会は、日本最高の展示会であり、非常に権威がある、少々金を使ってもいいから、あそこの展示場はどうしても見ておかないといけない、というものにしたい。

　アジアの一点であるポートアイランドの会場、それから、シカゴかニューヨークにあるアメリカの会場、ヨーロッパではドイツの会場というように世界の三つの拠点の一つにここがなって行ったなら大変に大きな役目を果して行くのではなかろうか、とそういう気がしますね。

百々　国際会議をやるときに通常よくいわれるのは、アコモデーション（宿泊設備）ですが、これは神戸ポートアイランドホテルができるのでいいとして、それからホ

スピタリティ、いろんな世話をしたり組織をつくったりすること、それから、エクスカーション、観光ですね。これについては神戸の特色を利かして海を案内する。また、一つは姫路城ですね。京都、奈良にも大きな城はないので、姫路城を利用することを考えないといけない。それと、プラス、エコノミーですね。この四つを考えないといけないと思いますね。

多田　いかに会議がスムーズに運営されるのをお手伝いするか、会議への協力がどれほど細やかであるか、そのホスピタリティが、国際会議場の評価を決める大きな要素です。そういう評判をとれば、自然にそこへ来てくれるということですね。

宮岡　展示場の方は、サンボーホールがありますから、あれを拡大した形での運営ということで、これは今までの経験がありますからできるでしょう。国際会議場というのは神戸では初めてですから、まず通訳から養成しないといけない。施設を運用する人材を育てて行くなかでサービスの行き届いた運用を計る。それが神戸の国際会議場としての名声を高める。

北川　昭和二十八年に大阪国際見本市の第一回がありました。二回目は東京、三回目は大阪と、延々とやっているわけです。どちらにも国際見本市事務局が設置されていて、一年先、二年先のプランをキッチリとっているわけです。これは東京、大阪が既得権みたいに代表して来たものですが、そういう既存の大きいフェアを今後は神戸へ移していただくというところからまず始めていただいて、そして神戸の地場の専門商社のフェア、そういうものを確立して行く。たとえばケミカルシューズ、あるいは、造船でも中味の航海計器というようなものの専門フェアですね。また、「ポートピア'81」以後の毎年毎年の国際展示場を充実して催しものをとって行くためには、相当、東京、大阪の国際見本市の事務局に優るとも劣らないような強力なものをつくっていただく必要がある。

国際交流会館では国際会議を核として逐次、全国的な会議を誘致するものとして、国際交流会館の運営事務局が恐らく行政の方で設置されるだろう。その滞在期間を過ごすのがホテルです。この三つは三身一体で相互有機的に関連して、相乗効果を発揮していただく。見本市だけで単体で動くというよりも、その三つを総合した国際情報文化都市化への促進になると思います。

私どもの電器製品でいいますと、六月三日に計測工業展が大阪の見本市会場の第二号館を使ってやります。エレクトロニクスショーは東京や大阪でやっておりますが、その内の通信機器とか、計測器だけでも展示会が成り立っているわけです。そういうものを、ひとつ、サンボーホールを第二号館といいますか、専門館として、そういうような形で活用していただきたい。場所は離れておりますが、新交通システムで結べるので、そう問題はないと思います。

また、対物情報といいますか、見本が国際展示場にたくさん並べられますので、輸入促進のための保税地域をその近くに設置していただいて、見本で商談、即売買契約の遂行という形をとっていただきたいですね。

望まれるヨーロッパ式の見本市経営

宮岡　五十六年の博覧会のときには両方の施設とも中に取り込まれる。展示場はパビリオン、会議場の七百人入るホールは催し物会場に使う。両方とも本格的になるのは博覧会が終ってからですね。日本の国際会議は年間二百五十前後あるようです。千人以上のものも若干ありますが、七百人以下のものが九割ほどですね。ただ、国際会議には学術的なもの、政治的なもの、経済的なものが多いんですが、政治的なものはどうしても東京が中心となる。特に学術的なものを中心に当初は始めたらどうかと思いますね。行く行くは経済的なもの、政治的なものでも誘致できるものは誘致して行く。

百々　神戸大学も段々と国際的なものが増えて来ており

ます。元々、講座でも国際経済とかが多い方で、今度、医学部に医学国際交流センターができました。東南アジアとの交流で熱帯医学をやり、また、中国関係の講座も比較的多い。そういうわけで神戸大学としても小さな会議でも使わしていただきたいと思います。それと、これは将来のことだと思いますが、留学生を対象とした、大学レベルではなくとも、ビジネススクールの形ででもポートアイランドにそういうものができれば、というビジョンをもっております。

北川　国際展示場の効果を最大に発揮させるためにでも同時通訳の養成が緊急の課題ですね。神戸市立で同時通訳養成の学校をつくっていただき、そこの卒業生はどこへ行ってもピカ一で通るというほどの学校にしていただければ非常にいいかと思います。

また、神戸の貿易商でも、各社の新人が東南アジアやヨーロッパ回りをしても様子が分らないので非常にロスが多い。そこで海外の事情を国別、地域別に事前に勉強して行くという講習機関を行政でつくって貰うと、無駄がなくなり、即戦力になると思いますね。

多田　国際会議のときだけ会議場に人が集るというのではなくて、あのフロアでは毎日何か会合があって人がいつもいるという施設にしたい。国際会議場という名前はついていますが、国際会議に限る必要はありません。人が集って話しあい、情報を交換しあって、何か実りのあるものをもちかえる場として、あのへんを賑やかな、明るい、人と物が集まり、情報が常にとびかっている生き生きとしたセンターにしたいですね。

鬼塚　問題は、どうやって、そういう展示場や会議場を運営して行くかですね。これが大変重要な問題になって来る。これは、第三セクターによる株式会社、神戸ポートアイランド国際見本市株式会社というような株式組織で運営して、そこがエキスパートになって行く。停年になったら天下りでそこのポストに来るというのじゃなく真剣に勝負のできる体制になって行かないと、応々に役所仕事になって成功しないのではないかという気がしますね。

催しものを次々に計画して行く場合に二通りありまして、一つは大阪や東京のように、ただ会場を切り売りして貸すという場合。したがって、そこの運営はすべて、たとえばスポーツ用品だったらスポーツ用品工業会が仕切って行き、主催者が会場費を払ったらいいという場合と、そうではなく、見本市株式会社がスポーツ用品業界と十分にタイアップして、彼らの意向をとり入れて、株式会社が展示会をアレンジする、計画をする。そして、出品料を参加する各社からとって行く。これはドイツ方式といってもいいんですが、ヨーロッパの見本市の運営方式です。ドイツでは年間スケジュールを決めたら世界に向って勧誘活動に出る。たとえば、ミュンヘンでスポーツ見本市があるとすれば、そのたびに東京まで来てレセプションをして大いにピー・アールをして、出展の呼びかけをして行く。神戸で国際展示場ができれば、ピー・アールする株式会社がなければ、ただ待っていても人が来るものじゃない。そういう実行する経営体をこの見本市会場にはつくらないといけない。そういう経営体が国際会議場と国際展示場と両方をやって行くのか、別々の経営体をつくるのがいいのか、これは専門的に検討しなければいけないと思いますが。

いずれにせよ即刻、これをつくって行かないといけない。建物ができてからでは遅いです。今年中には国際展示場を運営する企業体が必要ではなかろうかという気がしますね。

最近、日本が開発した商品でも多くの場合には、それを海外にもち出して商売をしている。世界のバイヤーを日本に集め、外国のメーカーにもどんどん出品させる。そういう意味で国際的な市場の展示の場ということになって行くわけですね。

（なお、鬼塚社長には誌上参加でお願いいたしました）

田崎真珠㈱
取締役社長　田崎俊作
神戸市葺合区旗塚通６－３－10
ＴＥＬ（078）231－3321

オールスタイル㈱
取締役社長　川上　勉
神戸市生田区伊藤町121
ＴＥＬ（078）321－2111

カネボウベルエイシー㈱
取締役社長　稲岡必三
神戸市生田区三宮町１丁目17－４
センタープラザ東館８Ｆ
ＴＥＬ（078）392－2101

㈱ベニヤ
取締役社長　松谷富士男
神戸市生田区三宮町１丁目54
ＴＥＬ（078）332－3155

モロゾフ㈱
取締役社長　葛野友太郎
神戸市東灘区御影本町６丁目11番19号
ＴＥＬ（078）851－1594

キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上５社の提供によるものです。